

2022年2月分総評 杉本真維子

「しよりしよりと／林檎をする、する、／平日昼間の父の物音」(つばき柗) 山口県  
人のおこないの素朴さと辛抱づよさのようなものが「生きる」を伝えている。平日、昼間、父などのワードが「しよりしより」という控えめな物音を味わい深いものになっている。

「全員が何かの予備軍であること／袋麺のふくろを破く」(白野) 新潟県  
いつもわっと人を驚かせるように口をひらく袋麺の「ふくろ」が、日常のもやを破く。

「夕陽に陰る観覧車／お母さんのお迎えを待つ／子供の背中を見ているよう」(佐藤潤華) 神奈川県  
詩の主体を「子供」ではなく観覧車という心を持たないものになっているところがポイント。それによってかえって際立つ心がある。

「思春期のやわらかき棘／／ふきげんな／さかなのように寝返りをして」(さいう) 愛知県  
「ふきげんな」が一瞬「ふざげんな」に見えることがあった。そんな錯覚をも「読み」の一つとしてすでに織り込んであるような、作品の懐の深さ。

「死ぬまでは常温なのに腐らない／漕ぐ人が肉、自転車は骨」(火鯨研) 熊本県  
人と自転車という二つのものを、「漕ぐ」という動作のもとに一体化させた視点が斬新。そのまなざしで世界を見渡せば、これまで見過ごしていたものが見えてきそうだ。

「目が覚めて窓は夜／残り雨が打っていて／頭はトタン／錆びたトタン／何か忘れてる」(氷丸) 茨城県  
「トタン」という畳みかけがそっと雨音をかたどる。その音に頭のなかを埋め尽くされるような失念も美しい。

「そこらじゅう／白いマスクの抜け殻が／溢れてもまだ羽化しない街」(湯たんぼ) 宮崎県  
この街を実際には見たことはなくても、たしかにイメージできる。コロナ時代の新しい光景なのだろう。

「ひめりんごみみたいな頬を／もむもむとさせて／ドリアをほおぼるいとこ」(さいう) 愛知県  
「もむもむ」という素晴らしいオノマトペが、比類ない臨場感を生み出している。

「弁当箱を出し忘れて／本日の弁当は無し／嬉しそうなのはなぜ？」(茶和鈴) 東京都  
なぜなのでしょう。弁当が無いという非日常に対し、心がわずかに躍るからかもしれません。その意味で幸福な三行です。

「地震にノって／ノリノリ／ノリノリ赤べこ」(降旗沃) 東京都  
人間のことなどおかまいなしに「ノリノリ」の赤べこ。その無情さはどこか「神」のすがたにも似ていて、魔除けであることが別の角度から腑に落ちることとなった。

「工事現場の／発電機から／夏が／生まれて／ いるみたいに」(立花ばとん) 東京都  
おそらく誰もが見覚えのある、そしてなぜか懐かしさを覚える場所が、ここにひかれています。最終行の文頭を下げて作った空白に、モーターから上がる猛烈な熱気が写生されている。

「句読点うつように眠る／読みやすくしとくから誰か／開け私を」(藤堂游) 愛知県  
「私」をわかってほしい、という訴えを、このようにしずかに美しく書けることに感動。

「灯台のかたちで／天を衝き上げる／アガパンサスにくらぐらと雨」(さいう) 愛知県  
言葉で経験をなぞるのではなく、言葉で新しい経験を作りだしている。昆虫だけが知っているような、まだ人間が知らない景色の鮮やかなひらかれ。

「風が開く一日一／こんなにも温かい2月の／ふくらはぎのような／柔らかさだ」(武中義人) 岡山県  
改行ごとにたっぷりと吸いこんだ空気が印象的。生みだされたリズムはまさに「ふくらはぎのような／柔らかさだ」。

しっかりと磨き上げれば言葉は光るものだと思います。来週も投稿をお待ちしています。